

久しぶりに中学校を訪問し、国語の授業を参観することになった。ところが、中学校の国語の教科書が手元にない。そうである。私は現在高等学校の先生であった。「これは困った」が、すぐにひらめいた。頼みの綱はK先生である。早速K先生に連絡してみた。数日後、快く梁川高校に届けてくれた。それも良質の魅力的なプレゼントとともに。「これは〇〇先生の資料です」「これはテレビ番組を録画したものです」

今年の夏、自宅近くのガソリンスタンドで車を洗っていると、私の眼前にひょっこりK先生が現れた。全くの偶然である。すると、以下のような話をしてくれた。

ある先生がある授業の中で、生徒に「好きな教科は何ですか」と聞いた。K先生は後ろでその授業を参観していた。結果は国語が数学よりも人気がなかった。K先生はこのことにいたくショックを受けた。「好きな教科は何ですか」学校で生徒によく聞くことがある。大抵上位にくるのは保健体育と相場が決まっている。国語は中位から下位グループになることが多いだろうか。数学や英語は不利である。苦戦することが多い。

自分の担当する国語が不利なはずの数学に負けたのである。K先生は考えた。現在の学校の生徒は、前任校の生徒と比べるとおとなしい。授業も停滞している感があった。そこに、追い打ちをかけるかのような結果である。さすがにK先生も悩み始めた。

そんなとき、通りかかったガソリンスタンドに見覚えのある人が、普段着のジャージ姿でいる。ジャージ姿の私に、K先生はすぐに前述の状況を説明し、「どうしたらいいでしょうか」と問いかけてきた。私は、ちょっと考えて「ディベートをやるといいよ」と答えた。私にも似たような経験があったのである。そのとき、現状を打破するために私が国語の授業に導入したのが「ディベート」だった。もうだいぶ昔のことである。今となつては、ディベートという言葉は浸透している。だが、その当時は学校でディベートを行っている教員はほとんどいなかった。

自分ではやったことがない。指導した経験もない。ではどうするか。本を買う。いろいろな資料を調べる。自分の授業を何とかするために必死になる。とにかく毎時間の国語の授業を変えたかったのである。後で考えてみると、私が授業を変えたいと思う以上に、目の前の生徒たちは「変わってほしい」と思っていたのかもしれない。もしかしたら「代わってほしい」と思っていたかもしれないのである。おそろしい。

自分なりに工夫をして手探りではあったがディベートを行った。私にはやる前から何となく確信っぽいものがあつた。「これだ」と思えるものがあつた。実践してみると、効果は予想以上であつた。きっと生徒たちは、こういった授業を待ち望んでいたのである。それまでの受け身的な停滞した雰囲気は一掃された。生徒が生き生きと活動するようになった。

一方、K先生はというと、私が以前渡した資料をもとにディベートをやってみたそうである。すると、やはり生徒が変わったそうである。国語の教科書を届けてくれたときにそのことを教えてくれた。ディベートがきっかけになったそうである。生徒が「先生、ディベートやりましょう」と言うのだそうである。これはすごいことである。生徒が知的な興奮を実感できたということである。

私はK先生にディベートを勧めたが、だれにでも勧めるわけではない。ディベートは万能ではない。特効薬でもない。誰がやっても同じ結果が出るわけではない。K先生ならばと思ったから勧めたのである。これだけは言える。ディベートは、K先生のような方がやると授業を変える、授業を活性化させる「起爆剤」となる。それが私の経験から言えることである。